

関西学院大学 研究成果報告

2018年 11月 14日

関西学院 院長殿

所属： 文学部
職名： 教授
氏名： 横内一雄

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国： イギリス ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	William Makepeace Thackerayの歴史小説研究
研究実施場所	ロンドン大学クイーン・メアリ校
研究期間	2018年 4月 1日 ～ 2018年 9月 19日（6ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

19世紀イギリスを代表する作家W・M・サッカリー（William Makepeace Thackeray）の歴史小説を研究することを目的に以下の活動を行った。

第一に、受け入れ先のロンドン大学クイーン・メアリ校でヴィクトリア朝文学の研究教育を担当し、またロンドン大学の19世紀セミナーを統括しているマシュー・イングルビー講師と面会し、研究の方向性や方法論をめぐって助言を求めた。その結果、サッカリー文学全般における歴史小説の位置づけに関して少し認識を修正し、近過去を扱った作品群、とりわけサッカリーとロンドンの関係に焦点を当てて当面の研究を進めることを決めた。

第二に、イングルビー氏の助言に従い、ロンドン大学セネット・ハウス図書館およびクイーン・メアリ校図書館において、日本ではアクセスできなかったサッカリー研究、ロマン主義文学研究、ヴィクトリア朝文学研究、19世紀イギリス史研究、19世紀イギリス芸術、19世紀フランス文学に関する資料の調査に努めた。とりわけ19世紀イギリスの雑誌文化については、日本でアクセスできる研究が限られているため、当地で現物に当たりつつ調査を進められたのは貴重であった。また、19世紀イギリス芸術についても、日本でアクセスできる研究が少ないため、当地の図書館は大変役立った。また、19世紀フランス文学に関しても、英語で書かれた研究書が豊富であったため、英語圏におけるフランス文学受容に関して調査を進めることができた。

第三に、大英図書館において、他ではアクセスできない貴重図書の調査に当たった。特に、19世紀中庸のマイナー作品——ウィリアム・マギンの『雑文集』(William Maginn, *Miscellanies*)、ジョージ・ヘンリー・ルイスの『ランソープ』(George Henry Lewis, *Ranthorpe*)、およびトマス・ミラーの『ゴドフリー・マルヴァン』(Thomas Miller, *Godfrey Malvern*) など——は、サッカー文学の周辺資料として大変貴重なものだった。また、これとは別に、サッカーが作家活動初期に寄稿していた19世紀中庸の月刊文芸雑誌『フレイザーズ誌』(*Fraser's Magazine*) についても、第1号から順を追って内容を整理する作業を進めることができた。

第四に、5月4日に、サッカーの子孫で遺品管理人でもあるジュリエット・マリー氏に面会し、貴重な遺品を見せてもらうとともに、サッカーおよびその娘で作家のアン・サッカー・リッチー(Ann Thackeray Ritchie) について話を伺った。

第五に、7月21日に、サッカーが少年時代に所属していたチャーターハウス校を訪問、現在の住人が施設内を案内するツアーに参加して、施設で保管されている資料を見学、および往時の生活について説明を伺った。他にも、ディケンズ博物館やカーライル博物館、その他ロンドン市内の博物館や資料館にも多数足を運んだ。

第六に、ロンドン大学クイーン・メアリ校で開催された18世紀セミナーに4月24日、5月17日、6月4日に出席、またセネット・ハウスで開催された19世紀セミナーに5月11日、6月8日に出席、また5月9日には旅行文学セミナー、5月18日にはロマン主義文学セミナー、6月6日には19世紀文学講演、6月7日には現代文学セミナー、9月11日にはセネットハウス交友会主催のディケンズ文学セミナーにそれぞれ出席した。このうち、6月6日の19世紀文学講演では、ヴィクトリア朝詩の権威であるイゾベル・アームストロング教授の知己を得るとともに、他のヴィクトリア朝研究者と交友を深めることができた。また、9月11日のディケンズ文学セミナーでは、ディケンズ文学の権威であるマイケル・スレーター教授と20年ぶりの再会を果たし、翌日には個人的に面会の時間を頂き、旧交を温めるとともにディケンズ文学についての話を伺うことができた。ディケンズはサッカーと同時代人でありまたライバルでもあった作家で、ロンドンのギャリック・クラブを舞台に両作家が文壇を二分する論争に巻きこまれた経緯があり、そのことについてもスレーター教授の意見を聞くことができた。

第七に、4月27日には、エディンバラ・ネイピア大学で開催された「文学と犯罪」のシンポジウムに出席した。本来であれば4月25日にリーズ大学で開催されるディケンズ文学セミナーにも参加する予定であったが、こちらは担当者の体調不良により急遽キャンセルされた。サッカーは19世紀初頭に流行した犯罪者小説に批判的な立場を取り、それを批判的に模倣した歴史小説『キャサリン』(*Catherine*) が彼の処女長編小説となったこと、また、彼の代表作『虚栄の市』(*Vanity Fair*) も犯罪者小説の要素を多分に含んでいることもあり、19世紀イギリスの犯罪資料の見方を教える「文学と犯罪」のシンポジウムは大変有益であった。

第八に、主に7月から8月にかけては、それまでに収集した情報を整理しつつ、論文執筆に集中した。まずはサッカーの歴史小説研究について大きな計画を練り、その序論に当たる部分の執筆を進めた。これはまだ完成の域に達していないが、とりわけサッカー文学のキーワードとなる「ボヘミアニズム」(bohemianism) について、パリの状況とロンドンの状況を対比しつつ、概念を整理することに努めた。次に、パリへの遊学から帰還した若きサッカーのロンドン時代の文化的状況に焦点を当てた「ロンドン時代のサッカー」についての論文を執筆し、こちらについては間もなく今年度の『人文論究』において発表予定である。さらに、サッカーがパリ遊学時代を材料に1830年代後半に執筆した初期のパリ物語に焦点を当てた論文を執筆し、こちらでも今年度の『英米文学』において発表する予定である。以上、3編の論文の準備をこの期間に進めた。

第九に、8月29日から31日にかけてエクセター大学で開催された全英ヴィクトリア朝学会(British Association of Victorian Studies) に出席し、最終日の31日にはサッカーと同門(いずれも前述のウィリアム・マギンの弟子)の作家トマス・カーライル(Thomas Carlyle)

の歴史文学『フランス革命』 (*The French Revolution*) について研究発表を行った。本作でカーライルが提示した歴史表象の方法は、当時の文壇に多大な影響を与え、本書の書評を書いたサッカリーもその例外ではなかった。サッカリーとカーライルの関係については、学会終了後に考察を続け、帰国後の9月22日に関西学院大学英米文学会で開催された講演「バーネット、カーライル、サッカリー——ロンドン遊学帰朝報告を兼ねて」において発表した。

以上、ロンドン留学中に「William Makepeace Thackerayの歴史小説研究」という研究課題のもとに行った活動を報告する。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高
中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に
支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。